

## 西洋音楽事始め

東光博英

チャルメラをご存知であろうか。ラーメンの商品名にもなっているが、元をただせば夜鳴きそば屋が吹く笛である。笛自体は中国から渡ってきた噴<sup>ふ</sup>吶<sup>ない</sup>という楽器とされている（『広辞苑』）。ところが、チャルメラの名はポルトガル語のcharamelaに由来し、16世紀半ばに日本に伝来した、オーボエに似た西洋楽器の名称である。現代ポルトガル語では「シャラメーラ」というが、当時の発音は「チャラメーラ」であった。古文書に「茶の湯」がChanoyuと記されていることから明白だ。即ち、昔の発音が、チャルメラと転訛しながら日本語に取り込まれ現代に伝わったわけである。ただ、なぜ中国の笛がその名で呼ばれるようになったのか。長崎でポルトガル人が笛をそう呼んだからと説く本もあるが定かではない。しかし、戦国時代末期の日本に、初めて西洋の音楽と種々の楽器をもたらしたのは、ポルトガル人を主とする南ヨーロッパの人々である。当時の日本で「南蛮人 nanbanjins」(*Historia de Japam*)と呼ばれた彼らは来日する際、中国船に乗ってくることもあったから、噴<sup>ふ</sup>吶<sup>ない</sup>がチャラメーラと混同されたのかも知れない。それはともかく、日本で最初に演奏された西洋楽器として記録にあるのは、チャラメーラとフラウタ(フルト)である。1551年、宣教師ザビエルが九州の府内(大分市)で領主の大友氏を訪ねる際、ポルトガル船の船長が演奏させた。いずれも吹奏楽器で、かさばらず壊れにくいから持ち運びやすい。南蛮人の船員や商人が日常的に携行していたことが窺える。南蛮船が来航する九州の港町では洋楽器の音色が日本人にも聞こえたであろう。和楽と何らかの交流があったかも知れない。だが、日本人に西洋音楽の実践と楽器演奏を積極的に伝授したのは彼らではない。キリスト教の宣教師たちであった。キリスト教会では古くから礼拝において常に讚美歌を歌ってきたのであり、その伴奏には種々の管弦楽器が用いられた。ザビエ

ルは、海外布教地において音楽を用いた典礼が異教徒を惹きつける効果が大いことを知っていたから、54年に来日した第3次宣教団には音楽に精通するイエズス会士5名が含まれ、グレゴリオ聖歌などの書物がもたらされた。彼らは日本人信者に聖歌の歌唱を指導し、57年には府内で聖歌隊による歌でミサを行っている。さらに60年代になると各地の教会で少年少女聖歌隊が組織されラテン語の聖歌を歌ったが、信心に満ちたそれはポルトガル人をも驚嘆させ恥入らせるほどであったという。その場にいたアルメイダ修道士は「発音と歌い方ははなはだ巧み」であったと記している(*Cartas de Iapão*)。その頃の伴奏には鍵盤楽器のクラヴィオ(ハープシコード)や、特にヴィオラ・ダルコが使われている。後者はヴィオラ・ダ・ガンバのことであり、膝上や脚間に挟んで演奏する弦楽器である。80年代に入ると信者の子弟の教育機関としてセミナリオ(神学校)が創設され、そこでは歌唱のみならず洋楽器演奏など組織的な音楽教育が行われた。音楽は日本語とラテン語に並んで、生徒の評価基準となる重要な科目であった。82年にローマへ向かった天正遣欧使節の伊東マンショら少年たちもその生徒であり、エヴォラでは大聖堂のオルガンを見事に弾奏し、帰国後は京都の聚楽第で豊田秀吉に楽器演奏を披露している。17世紀初頭にはオルガンなどの洋楽器が国内で作られるようになるなど、恐らく信者に限定されていたとはいえ日本人による西洋音楽の実践はかなりの域に達していたようである。けだし、そのようにキリスト教と密接であったからこそ禁教令が下ると洋楽もまた運命を共にすることになったのであろう。しかし、和楽に何も影響しなかったのか。宣教師の記録には降誕祭や復活祭、屋外での聖体行列では大勢の異教徒が異風な儀式を見物しに訪れ、街路では信者でない者までがラテン語聖歌を口ずさんでいたとある(Ibid.)。皆川達夫氏は箏曲「六段」に洋楽との類似点を指摘しているが、日本の音楽にいくらか影響を与えた可能性はあるように思われる。

とうこう ひろひで(非常勤講師 日本・ポルトガル交渉史)